

# 令和元年度第2回鳥取県総合教育会議 議事録

## 1 日 時

令和2年2月10日（月） 午後1時から午後3時まで

## 2 場 所

鳥取県庁 特別会議室

## 3 出席者

知事 平井伸治

教育長 山本仁志

教育長職務代行者 中島諒人

教育委員 若原道昭

教育委員 佐伯啓子

教育委員会事務局理事監兼博物館長 田中規靖

教育委員会事務局次長 森田靖彦

教育委員会事務局 教育次長 足羽英樹

有識者委員 石原太一

有識者委員 大羽沢子

有識者委員 坂口瑞穂

有識者委員 福壽みどり

有識者委員 松本篤己

有識者委員 馬淵牧子

事務局 子育て・人財局長 木本美喜

子育て・人財局総合教育推進課長 堀田晶子

## 4 あいさつ

### （木本局長）

- ・令和元年度第2回鳥取県総合教育会議を開催する。開会に当たり、平井知事から挨拶を申し上げる。

### （平井知事）

- ・今年度も押し参り、県議会も始まろうとしている。私の方では、子どもたちの未来のために切り開いていかないといけない課題が多くある。最近の状況を見ると、学力について、全国調査によると鳥取県は低下傾向にある。残念ながら歯止めがかからない状況である。英語教育など、国際的な人材育成も喫緊の課題である。

- ・ Society5.0 といった新しい教育人材の姿も見えてきたところである。これについては、GIGAスクールに係る事業について、2月3日に開催された県議会で7億円程度の補正予算を計上し、環境づくりを進めているところである。人材がそれを担う必要があり、どうやって子どもに教えていくのかといった大きな課題も出てきている。
- ・ 長年の懸案であった美術館については、建設の姿がようやく見えてきたところである。楨先生の「ひろま」という空間を活用して一つのアートの殿堂を造る。全县に有機的に繋がり、活動が地域に溶け込んでいくことを目指しており、新しい美術館のスタイルが鳥取県から作られるかもしれない。
- ・ 国の方では、大学入試の制度が二転三転し、子どもたちが大変戸惑ったと思う。私たちは、翻弄されることなく、しっかりと子どもたちの個性を伸ばし、実力を伸ばしていく教育を実現していかなければならない。
- ・ 本日は、有識者委員の皆様もフレッシュなメンバーが加わり、船出することになった。ぜひ実り多い教育の姿を、皆様のお力・お知恵で色々アドバイスをいただきながら作っていききたい。
- ・ 「勉強の秋灯一つのみ更くる」。日野草城氏の句である。勉強していて、ぽつんと秋の灯りが一つ、夜更けの様子。子どもたちにこうした世界を作っていかなければならない。ぜひ皆様のお力をいただけるよう、心からお願い申し上げます。今日の議論により、新しい年度、花開いた大綱の下に良い教育が発展していくことをお祈り申し上げます。私の挨拶は以上となる。本日はよろしくお願い申し上げます。

#### **(木本局長)**

- ・ 続いて、山本教育長に御挨拶をお願いする。

#### **(山本教育長)**

- ・ 皆様にはこのような貴重な時間をいただき、感謝申し上げます。また、日頃より、御意見いただき、人材育成に多大なる御尽力、お力添えを賜り、心より感謝申し上げます。教育をめぐる課題は多く、いよいよ来年度から新しい学習指導要領が全面実施となり、英語の教科化やプログラミング教育にしっかりと取り組んでいかなければならない。スポーツにおいても、東京オリンピック・パラリンピックが開催されるため、これを契機にスポーツ・文化の振興にも力を入れていかなければならない。
- ・ 総合教育会議の中では、学力向上など、これまで様々な御意見をいただき、一つずつ着実に組み合わせることが大切だと考えている。今年度は、全国に先駆け、ICTを活用し、長期の不登校になっている児童生徒に対して家庭で学習できるシステムを導入したところである。また、若者の県内定着に向けて、仕事や産業について、子どもたちにしっかりと学んでもらおうと、ふるさとキャリア教育の取組を強化しているところである。
- ・ 来年度に向けては、これまでいただいた御意見を基に、学力向上で言えば、「鳥取県学力向上推進プラン」を作成し、それに基づく取組を行う。また、平均点だけではなく、子どもたち一人一人の力を把握しながら伸ばしていく仕組みが必要ではないかということで、新たに県独自の学力学習状況調査の検討に向かっている。タブレットを文房具のように学習に使っていくということも国の動きを見ながら予定しているところである。県立高校の魅力化についても、新しい仕組みとして国際バカロレア教育という新たな取組を検討し、大綱の中に盛り込ませていただいたところである。今

後とも、小さな県ではあるが、自然や人の絆を活かす鳥取県らしい教育をしっかりと進めていければと考えている。本日も含め、引き続き御意見を賜り、鳥取県の教育に活かしていければと考えている。よろしくお願ひしたい。

## 5 新任の有識者委員の紹介

新任の有識者委員4名に一言ずつ挨拶をいただいた。

※新任6名、うち2名は欠席。

## 6 意見交換

### (木本局長)

- ・それでは意見交換に移る。まず、鳥取県の教育に関する大綱の改定について堀田課長に説明をお願いする。

### (堀田課長)

- ・資料1の1「鳥取県の教育に関する大綱の改定（案）について」説明させていただく。大綱は、第一編に本年度から4年度までの中期的な取組方針が5つ挙げられており、第二編にこれらの方針に沿って重点取組策を明記している。改定案の中で、主に新たに加わったものを説明する。
- ・方針1「学ぶ意欲を高める学校教育の推進」においては、国際バカロレア教育の導入検討など、生徒数減少を見据えた県立高校の魅力化推進、また後に詳細説明があるが、「鳥取県学力向上推進プラン」の策定、Society5.0時代に生きる子どもたちのためのICT環境整備の実現、小中高一貫した学びを重視した英語教育や小学校英語専科加配教員の活用など、グローバル化に対応した英語教育の推進を挙げている。
- ・方針2「『ふるさと鳥取』を支える『人財』の育成」においては、キャリアパスポートの導入など、小学校から高等学校までの系統的なふるさとキャリア教育の推進を明記している。
- ・方針3「時代や社会の変化に対応できる教育環境の充実」においては、マニュアルを活用したいじめや児童虐待の対応力の強化、高校中途退学者等への切れ目のない支援や市町村と連携した多様な学びと機会の確保を挙げている。働き方改革として、労働関係法令に加えて、公立学校に関する教職員の勤務時間の上限に関する法律の遵守に向けた取組促進、本県の新たな取組への対応として、県内就職促進のためのアプリを活用した県内就職情報等の配信、子育て世帯の経済的負担軽減等を目的とした高校生の通学費支援を明記している。
- ・資料1-2に改定案があり、その後に改定案の参考として見え消しの資料を付けている。そちらの2頁5行目に赤字で示しているが、今のSDGsに対する取り組みを加えている。以上簡単ではあるが説明を終わらせていただく。

### (木本局長)

続けて、「学力向上施策の推進について」足羽教育次長から説明をお願いする。

### (足羽教育次長)

- ・学力向上施策の推進ということで、英語教育も合わせて説明させていただく。資料2-1を御覧いただきたい。これまで、全国学力学習状況調査で明らかになった様々な課題に対し、現状を踏まえて改めて児童生徒の学力の状況をしっかりと見極めた上で、総合的、戦略的、中長期的な立場でのプランを明確に策定し、学力向上施策を進めていきたい。具体的な内容については資料2-3が、

現在、学力向上のワーキング会議等でも検討を重ねている本体になる。今年度末策定を目指し、内容の整備を行っているところである。

- ・大きな課題取組としては2点ある。学力学習状況調査では、小学校6年生と中学校3年生のみ、その学力状況を相対的に全国平均等で比べることになるが、もう少し詳しく個々の成長や学習の理解度を図る必要がある。
- ・一方で、子どもたちの算数を中心とした学習意欲をどう高めていくのかが大きな課題として挙がってきているところである。それらに向けて、市町村教育委員会とも連携を図りながら、授業をどう作り上げていくか、大量退職・若手教員大量採用の時代の中で、若手教員をどう育成するかということに向けて重点的に取組むこととしている。
- ・来年度に向けた施策については、先ほども説明したが、県独自の「とっとり学力・学習状況調査」を試験的に導入し、将来的には全県全市町村で実施したいと考えている。また、各地区で取り上げてきた単元別活用問題集や評価達成度問題、これらも全県展開に繋げていきたいと考えている。
- ・若手教員の指導力向上に向けた研修会、将来のリーダーを養成するため、若手の養成を進めていきたい。
- ・英語教育については、新学習指導要領が順次実施されていく中で、小学校に英語教育を本格的に導入されることになった。小・中・高と鳥取県らしい英語教育の積み重ね、学びとは一体何なのだろうかということ、外部試験を活用したり、リサーチをしっかりと行いながらプラン作りを進めていきたい。
- ・英語教育における教員の課題としては、子どもたちにバランスの取れた4技能を指導していくこと、そのための授業の在り方、指導の在り方がどう在るべきなのかということが大きな課題となっている。課題を明確にしながら、今後は、小学校・中学校の連続した義務教育における7年間の英語教育プランを練り上げ、発達段階に応じて英語教育の積み重ねを重視し、その連携をいかに進めていくかという観点に立ち、子どもたちの課題解決、引いては教員の指導側の課題解決に向けた英語教育の推進を進めていきたい。以上である。

#### **(木本局長)**

続けて、「鳥取県立美術館整備の取組状況について」田中理事監兼博物館長から説明をお願いする。

#### **(田中理事監兼博物館長)**

- ・現在、博物館の中に美術部門もあるが、そこが手狭だということで、新たに美術館の建設の検討を行った。平成30年7月に美術館の基本方針を策定し、必要な手続きを経て新たな美術館整備ということで、PFIという手法で整備・運営を行うため、その事業者グループを決定したところである。
- ・事業期間については、来年度から実際に設計等に着手し、運営まで含めて20年間、実施事業者に整備運営を行ってもらう。その施設の規模については、約1万㎡の美術館を整備しようというものである。落札者は大和リースグループが中心となり、関係する企業が特別目的会社を作り整備運営を行う。美術館の整備は資料のとおり、大きな屋根の下に様々な体験が立体的に展開できる大きな「ひろま」で、美術館の愛好者も含め、様々な方がこの場所に集まり、賑わいに繋がるような美術館にしていきたいと考えている。

- ・今後のスケジュールについては、今年度末にこの事業グループと事業契約を締結し、設計・建設を進めて令和6年度中の開館を目指している。また、ハード整備に合わせて、美術館の開館に向けて、学校教育との連携を行うため美術ラーニングセンターという機能を美術館に持たせるとともに、様々な方に美術館の運営に関わってもらい、美術館の普及事業や県内にある民間の美術館との連携について取組を並行して進めていきたいと考えている。説明は以上である。

**(木本局長)**

これより、各委員から順に御意見を伺う。まず、石原委員からお願いします。

**(石原委員)**

- ・2点申し上げたい。まず学力向上について、教育委員会が学校に出向き、管理職の先生方に対する別の視点での指導助言を行うなど、教育委員会と学校の管理職がワンチームとなって授業改善に取り組む姿勢が良いなと思った。
- ・もう1点、ICT教育について、今は、ソフト面でドリル教材が出ており、個々に異なる課題を与えたりとか、同じ授業時間中に別々の課題に取り組めるとか、そういった教材自体をどう活用していくのかが重要である。生徒たちが勉強した記録とか、ノートなどを皆で共有しながらそれぞれの得意分野を把握することもできる。ソフトは色々な活用の仕方があり、様々な業者が販売しているので、検討していただき、使いやすい形で活用していただけたらと思う。
- ・県立高校の魅力化について、国際バカロレアの話もあったが、こういった取り組みを積極的にやっていただきたい。例えば青谷高校だったら歴史に特化した学科を設置したり、生徒が少なくなる中で、色々なテーマを持ち、地域でできる教育を行っていかなければならない。こういった取組をどんどん進めてほしい。

**(木本局長)**

- ・続いて、大羽委員をお願いします。

**(大羽委員)**

- ・大きくは1点、学校における業務の効率化というところで、教員の働き方のことに触れてあるが、その点について言いたい。ICTが入ってきて、学校が益々忙しくなるのでは困る。教員自身も、どれくらいICTを活用しているかということが大切になってくる。ICTを教える教員に対して、ICTの便利さや良さを自身も体感してもらう場を作る必要がある。そうすることで、子どもたちにICTの良さをより具体的に教えることができる。
- ・授業改善については、エキスパート教員の動画配信を考えているとのことだったが、それを見た先生が「こんなことを聞きたいな」と思った時、どういったバックアップの体制があるのかという点も大切だと考える。某県の進学校では、大学の先生とビデオ通話で繋がって、決まった時間に教員1人または1グループ15分程度相談できる仕組みがある。今までは、大学の先生を呼んで研修会をお願いしてということが定番だったと思うが、来てもらう費用や時間が要らなくなる。5Gになると、本当にそこにいるように話をするができる。そのような考えをもってICTの便利さ等を体感してもらえると、先生方も忙しくなく、子どもたちも遊ぶ時間が増えるというような発想で取り組んでいけると思う。
- ・学力向上についても色々なプランがあり、非常に緻密な案が出ているので、それをうまく効率化して、教員、子どもたちどちらにとっても良いような形になっていくとありがたい。

## (木本局長)

- ・続いて、坂口委員にお願いします。

## (坂口委員)

- ・教育機関を拠点に活動する福祉の専門職で、主に不登校やいじめ、子どもの学びや育ちの環境面への支援から話をさせていただく。仕事を通して地域や学校、保護者や先生方も含めて関わる機会がある中で、地域の過疎化、核家族化が進んできており、小学校では、愛着形成の課題を背景とする問題行動が増えていると感じる。
- ・社会情勢で離婚率が高くなり、ひとり親家庭の経済状況や共働き世帯の保護者の余裕のない精神状態も見受けられる。そういう状況は、子どもたちの生活に何かしら影響を与え、不登校やいじめ、暴力行為を引き起こす要因の一つになっていると感じている。不登校やいじめはその子自身が抱える心理的な問題もあるが、その背景に生活困窮、心理的虐待、ネグレクト等、親から受ける問題も潜んでいることがある。
- ・スクールソーシャルワーカーと学校が早い段階で連携することで、専門機関や福祉行政の支援、福祉サービス等の社会資源に繋げることができるが、本当に困っている人は、SOSを出す術を知らない人も多い。そういう家庭に、スクールソーシャルワーカーや専門職が、学校をプラットフォームとすることで、地域の関係者、行政機関、専門機関を巻き込みながらアウトリーチをしていくという手法もあるが、学校組織の中では、先生方が抱え込んでしまい、学校だけの対応を取ってしまうケースが多いと感じている。
- ・令和元年度には、鳥取県いじめ対応マニュアル、虐待対応マニュアルが作成され、教育相談体制充実の手引きも各市町村教育委員会から各学校に通知されている。研修も実施されているが、教職員、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー等が連携して対応していく体制にはまだ至っていないと感じている。課題としては、スクールソーシャルワーカーの一人一人のスキルの差や、雇用形態、活動状況など物理的な問題も感じている。各小学校に配置されるスクールカウンセラーは、月に1回、3～4時間程度、スクールソーシャルワーカーも、自治体や学校によって異なり、課題が起きた時に、すぐに連携を取ることを考えると、現実的に難しい面もある。学校と専門職の連携した支援が更に充実して活用されるよう、専門職の雇用形態の安定、スキルアップの研修の機会の拡充を進めていただきたい。
- ・早期に支援を行うことは、同時に先生方が子どもたちの指導に専念できる環境を整えることができると感じている。学校だけで問題を抱え込まず、役割分担することで、先生の多忙解消、時間軽減につながり、働き方改革の一助になると考えている。
- ・特別支援の充実について、教育委員会からの報告を読むと、県内で発達障がいと診断される児童数が年々増加している。以前、ある研修に参加した際、発達障がいは先天的なものだが、5歳児健診や就学前健診で特に問題のなかった小中学生が発達障がいと診断されるケースが増えていると聞いた。特に興味深かったのは、貧困家庭に特に多いと言われており、やはり家庭環境が不適切であったり、保護者による教育能力が不十分な状況であったり、余裕のない生活をしているということは、子どもたちの心理に影響して障がいの有無に関わらず、子どもの発達に影響を与えていると感じている。

- ・実際、学校現場でも、親から関りが不十分な子どもたちは、学校生活が落ち着かず、学習や特別活動などに集中して向かえないという姿が見受けられる。その中で、先生方も学級運営がうまくいかず、きちんとした授業ができていないということで苦慮されている状況がある。
- ・厚生労働省の国民生活基礎調査の中でも、世帯年収と子どもの学力の関係性というのは、高所得世帯に比べ低所得世帯の方で低いという結果も出ている。一概には言えないが、経済状況が家庭教育に反映されるということは周知の事実だと思う。
- ・子どもの愛着形成は、親だけでなく、身近な大人でも作れると言われている。地域の方や学校の先生、学習支援のボランティアの方でも、家以外に「子供にとっての心の安定基地」を増やしていくことも愛着形成の一つだと思う。
- ・学力向上は重要なことではあるが、土台となる家庭教育というものは、安定した愛着環境が必要であり、学校の先生方が十分な指導力を発揮するためにも、家庭支援を同時に行っていないと成果は出ないのではないかと感じている。家庭を支援する貧困対策、学校を助ける専門職の活用を行い、困っている家庭に寄り添い支援し続ける体制を確保することが大切だと感じている。
- ・子どもの学びや教育資源として、フリースクール通所費用支援、県内高校等に遠距離通学する生徒への通学費支援など、どの子どもにも等しく学びの機会を与えることにつながり、大変喜ばしい制度だなと感じた。

#### **(木本局長)**

- ・続いて、福壽委員にお願いする。

#### **(福壽委員)**

- ・学校での決まり事について、子どもの進路が決定したため、4月以降の生活のためにアルバイトをさせてはどうかと思い学校にお願いをしたところ、「福壽さんだけ特別扱いするわけにはいかない」と却下された。他の保護者からも同様の声が上がっていたが、ダメだった。多くの保護者から要望があるというのは、ニーズがあると捉えるべきではないと感じる。色々な理由でアルバイトをする方もいるが、学校の許可なく行くと、トラブルに巻き込まれたときに相談することができず大きな問題になってしまう。親としては、先の見通しを立ててお願いしたにも関わらず、認めてもらえないものなのかと感じた出来事があった。
- ・大綱の中に、「家庭教育の充実」という項目があるが、家庭教育に何を求められているのか読み取れない。家庭での学習時間を確保させることが家庭教育なのか、もっと具体的にこんなことを充実させていきたいと書いていただきたい。
- ・幼稚園教育の「遊びきる子ども」というフレーズに疑問を感じる。一見良い感じはするが、その先の目標は何なのだろうと思う。幼稚園で遊びきったら「これから勉強の時間よ」というような感じがする。遊びきった子どもたちは、「楽しかったね。おもしろかったね」と言われたいはずなのに、それを頑張ったと評価されると、子どもたちは遊ぶことすら頑張ることになってしまうのじゃないかなと少し気になった。
- ・学力向上については、色々な方法で分かったに繋がれば良いと思うが、学校からは学校で教える内容と家庭で教える内容が異なると子どもが混乱すると言われることがある。色々な方法で分かったを教えていくことができると思う。

- ・ICTタブレットを持つと、デジタル書籍を拡大する等、その子に合った使い方ができ、子どもたちの役に立つと思う。ただ、使い方によっては、問題を写せば答えが出てくるような便利なアプリがあるため、身につく学びがきちんとできるのか疑問に思うところもある。
- ・学力向上施策については、やる気がある子が前提になっている気がする。学習に心が向かない子どもたちを学習に向けていくためには何が必要なのかということが、親として一番の悩みどころである。そこさえ向いてしまえば伸びていくと思うがそこになかなか気持ちが向かない。
- ・特別支援については、障がいの有無に関わらず、同じ社会で生活していくため、もっとインクルーシブな方向に向かっていけたら良いなと感じた。

#### **(木本局長)**

- ・続いて、松本委員にお願いします。

#### **(松本委員)**

- ・長年、塾業の世界に携わってきたため、その時の経験を基に話をさせていただく。学力向上について、先日、中学2年生の授業の中で、「2分の21は、数直線上でどの辺りになるのか、小数に直すといくつか」という問いをしたところ、生徒はおもむおに筆算を行っていた。2分の21の計算の仕方は分かっているが、具体的にどのぐらいの量を表すのかというところを分かっている。筆算で正しい答えを導くこともできなかった。ここで考えたのが、小学校での学習もだが、小学校に上がる段階の前で、親と一緒に家庭の身の回りにある色々な現象から物事を考える経験が少ないのではと感じた。
- ・英語教育について、小学校での外国語活動がスタートして、中学校に入ってくるが、入る前の段階で、もう英語は嫌いだという子も非常に多い。自分の経験からいうと、小学校時代に英語を勉強しなくても、自分が指導していけば多分好きになってくれるだろうと自負している。今回の会議の資料に、英語4技能のバランスのことが記載されているが、果たしてバランスは必要なのかなと思ったところである。言語を獲得していくためには、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングがあってということだと思うが、どの段階でバランスを良くしたいのかが見えてこない。そもそもバランスが必要なのだろうか。今の時代、機械があれば自動で翻訳してくれ、大学では文献を読む力さえあれば問題ない。特に日本は、日本語だけでも十分に生活することができる。そのような中で、本当にバランスが必要なのかなと感じた。
- ・英語教育の推進について、本校でも中学3年生からクラスを分け、ある程度の力がある子を対象に、All Englishの授業を展開している。生徒の力をそこに持っていくためには、ある程度の基礎が必要となってくる。その基礎がない状態での授業は、生徒にとっても辛い時間だと感じている。そういった意味で、中学校の先生の英検取得状況を見て愕然とし、心配な気持ちが非常に強くなった。高校の先生は、高い取得状況なので、非常に期待している。
- ・数学・算数については、基礎基本が一番大切だと思う。自分の学校では、中学1年生、2年生に100マス計算をさせ、数字に対する感覚を大切にしている。県の方も色々な施策を考えており、非常に期待したい。

#### **(木本局長)**

- ・続いて、馬淵委員にお願いします。



### (馬淵委員)

- ・運動指導に携わっているのもので、スポーツ・文化・芸術の振興というところで、現場で感じることを3点発言させていただく。1点目は、子どもたちの運動する機会がだんだん減ってきていると感じている。放課後は、習い事や学童に行くため、運動の機会がない。以前、盲学校の体育の授業に行った際、数年前、教育委員会で作成された「ワンミニッツ・エクササイズ」の動画で楽しそうに準備運動をしていた。他の学校でもしたら良いのにと感じた。私も、企業に訪問して運動指導をさせてもらっているが、3分間の体操で脳がリフレッシュし、ストレスの緩和や仕事の効率を上げる効果がある。メンタル面での改善や運動習慣が付いたとの意見もあった。子どもたちも学校に缶詰、塾で缶詰という状況を見ると、少しの時間でもエクササイズ運動に取り組むことで、脳のリフレッシュが図られ、学習意欲も向上し、授業に集中できる力にも繋がって行くんじゃないかなと思います、せっかく作られた動画なので、もっと学校に取り入れてもらい、効果が現れれば、全部の学校で取り入れてもらえたらと思う。
- ・2点目は、乳幼児期からの運動との関わりをもつことが非常に大切だと感じている。赤ちゃんが寝返りしたり、ハイハイしたりするのは全部「運動」である。ベビーカーから出たい出たいと体を動かすのも運動の一つだが、最近では、ベビーカーにスマホを取り付けるなど、スマホ育児により、赤ちゃんの運動の機会を無くしてしまっている。神経系は、6歳までに90%発達しきると言われており、6歳までにどう運動との関わりを持つかが非常に大切である。私たちは、各年齢にあった運動を提案しており、この時期に良い運動の機会が与えられないまま小学校に入学すると、いきなり競争をさせられ、「僕はビリだ」と運動嫌いになり、益々運動しなくなるという悪循環が生まれてしまう。実際に私たちが運動の指導をしている園は3～4つなので、もっと必要性を感じてもらえるにはどう働きかけていったら良いのかという課題もある。そこがクリアできれば、運動能力の向上に繋がっていくのではないかと考える。
- ・3点目は、運動の正しい指導方法の普及についてである。小学校の体育の授業や部活動でやっている例えばストレッチについて、私たちから見ると、間違っていると思うことが多々ある。将来的に子どもたちは高校に進学して部活動であったり、トップアスリートを目指す子もいるので、小学校の時期からきちんとした運動を教えられる人材が大切だと思う。教員や保護者に対して、運動の正しい知識について研修等を行っていく必要があると思う。

### (木本局長)

- ・それでは、教育委員の皆様から御意見をいただく。まず佐伯教育委員にお願いする。

### (佐伯教育委員)

- ・有識者委員の方から貴重な御意見、御示唆、熱い思いを聞かせていただき、参考にさせていただきたいことがたくさんあり、教育委員会の方でも考えていきたいと思う。
- ・学力のことはとても大切で、特に子どもたちに寄り添った学びを実現できるようにしていくことは外せないと考えている。今回、教育委員会では、独自の学力調査を試行的であるが4年生以上に実施することを考えており、どのように活用することができるのか、具体的にしっかりとみていくながら、全県にも発展していけば良いと思っている。
- ・学力と関連して出てくるのが、ICTの活用についてである。石原委員からも意見があったが、教職員がどれぐらい対応できるのか心配される場所である。研修も綿密に計画してはいるが、年齢

が上になるにつれ苦手意識があるのではないかと思う。そこを克服していかなければならない。大羽委員の意見にもあったが、それを活用することで時間短縮できるような取組になっていけばと思う。ICTを取り入れることで子どもたちの個々の学びに対応し、文字を大きくしたり、読むところだけ明るくしたりと、文字が見やすくなるということもあり、一人一人の子どもに添った活用が実現し、活用例を広めていけたらと考える。学力の向上とICTの活用が平行して進んでいけたらと思う。

- ・小学校での英語教育が本格的にスタートする。今までの小学校の先生は、外国語を教えることはなく、それを教えないといけないということでとても苦手意識やうまくできるかなという不安な気持ちを持っている。外国語教育の加配も付けてもらい、支援員も入るので、そういった方の力を借りながらできるだけスムーズに移行し、外国語を学ぶのが楽しいなと思ってもらえるよう、先ほど、松本委員の意見にあったように、中学校に入るときから苦手意識を持った子どもにしないよう、英語の学びが育っていくことを願っている。身近に、英語でコミュニケーションが取れる機会が少ないため、英語の学びがスムーズに進行していけるような情報交換の場を設けながら、子どもたちが興味・関心を持って苦手意識を持たずに成長していくことを県の中で広めていけたらと思う。
- ・キャリア・パスポートの取組がいよいよ始まる。一人一人の子どもが自分のキャリアを記録していく、担任の先生とのやりとりを通して自分の得意なことや将来について、小学校から高校まで系統的に記録されていく。担任の先生は負担に思うのではなく、一人一人の子どもの積み重ねた記録を読み、その子自身の強み等を把握し、さらに伸ばしていくためにどうするべきか、情報を活用していくことが大切である。いよいよキャリア・パスポートの取組が始まるので、きちんと検証していきたい。
- ・いじめ・不登校について、大綱の中に「誰一人取り残さない」という言葉が入りとても心に残った。子どもたちの変化を逃すことがない学校や教師集団であるべきである。子どもを取り巻く環境の中では、地域の方や放課後の学童ボランティア等から情報が入ってくることもあり、学校現場は、それを見逃すことなく、スクールソーシャルワーカーや地域の福祉に繋げていくことを、もう少し声を上げて進めていきたいと思っている。

#### **(木本局長)**

- ・次に若原教育委員にお願いする。

#### **(若原教育委員)**

- ・それぞれの有識者委員から、様々な視点で貴重な意見を聞かせていただいた。私のような年齢になると、新しいものに対して受け入れる力がどうしても気になってくる。文部科学省や中央教育審議会も次々と新しい言葉を出してくる。例えばSociety5.0、バカロレア教育、ICT活用教育、ICT人材養成という言葉があり、10年前ぐらいのキーワードは知識基盤社会という言葉が使われていた。学校に対する要求、教員に対する要求が変化していく中で、その新しい要求を軽々とこなしていける先生であれば良いが、そういう方たちばかりではないと考えている。そういった先生方の学び直しや新しいもの対応するための準備が、先生の負担を招かないようにしていかなければならない。その上で、言葉に振り回されず、地に足のついた教育を行っていくことが大切だと思う。
- ・Society5.0は、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く新たな社会で、情報社会という言葉に対応するのが知識基盤社会というキーワードかなと思うが、AI社会というのは、あらゆるデ

ータを収集蓄積して、それに基づいて将来を予測し、今取るべき行動をAIが判断する社会である。そうすることによって、飛躍するかもしれないが、全ての子ども一人一人のあらゆる学びと成長をデータ化し、蓄積していくと入試は必要なくなるのではと考える。入試は、どうしても客観性・公平性が担保されないといけない。AIは一気に解決してくれる面もあると思っている。そういう社会になっていった方が良いのか私にも分からないが、それぞれの社会に応じた人材養成教育が求められており、これからの社会に求められる教育というものはどういったものなのか、真剣に考えていかなければならない。

#### **(木本局長)**

- ・次に中島教育長職務代行者に願います。

#### **(中島教育長職務代行者)**

- ・お忙しいところお越しいただき、貴重な御意見をいただき感謝申し上げます。馬淵委員の意見にあったとおり、運動の機会については、本当にその通りだと思うし、長期的に見たとき、健康ということにも繋がるし、体を動かすということは人間の生きる喜びにも繋がっていく。私たちは忘れかけているが、体を動かす喜びは色々な場面で発見していかなければならない。そのために、学校教育や保護者を巻き込んでいくことは重要なことだと感じた。松本委員の意見にあった、色々な生活経験の希薄化ということが数学の概念の中にも繋がっているということ、英語の4技能のバランスについて、対応策は難しいが重要なことだと思った。福壽委員の校則のことについては、今の時代、校則は大げさな良いかをする「民主主義の在り方を学校で学ぶ」という視点で考えたとき、子どもたち自身や先生、保護者も含めて考えていくことが何よりも学びに繋がるのではないかと考える。坂口委員の意見にあった愛着や貧困の問題が非常に重要な課題という話については、なかなか学力向上の取組を進めても伸びない中、やはり家庭の問題があり、容易には探りづらい問題ではあるが、そのことが色々な核になるということに、私たちが問題意識を持ちつつあり、そこを探るための指導・アドバイスをいただきたいと思う。大羽委員から意見のあったICT教育の効率化や、石原委員から意見のあったICTのデバイスの使い方について、まずはGIGAスクールみたいな状況の中で、それぞれの状況に合わせて学ぶために、デバイスだけでなくソフトについての費用も必要となってくるが、その辺も色々御指導いただきながらしっかりやっていかなければと思う。
- ・本日、全般的に感じたことは、誰一人取り残さないという言葉が大綱の中に加わったが、ある意味、嘘だろうと思う。世の中こんなに階級の差が進み、貧困家庭の問題がある中、誰一人取り残さないなんて綺麗事過ぎると。ただ、そうだからこそ、やはり教育が目指すところは「誰一人取り残さない」というところなのではないかと思う。学びの個別化の話が出てきていたが、要するに、誰一人取り残さないというのは、全員を同じ所に連れて行こうというこおではなく、皆がそれぞれ生きたいところに行けるよう、それぞれの力が発見し、それを伸ばしていく教育環境をどういう風に作っていいのか、色々な場面に応じた支援を検討していかなければならない。
- ・来年度からの試みの中では、GIGAスクールという重要なポイントがあるが、中山間地の学校だと光回線が来ていないという学校もあり、どれだけ通信速度を確保することができるのか、そういったことも気にしていかなければならない。ICTの活用では、ドリル的な部分と外国の情報に触れながら自分たちで表現していくデバイスの使い方についても、色々なところで実践していかなければならない。倉吉東高校で、来年度実践を予定されているので、気にしていないといけない。

- ・各県域3カ所の中学校で校内フリースクールの取組を始めようとしており、クラスに入れない子が保健室ではなく、教室に席を持ちながら自分のやりやすい形で学んでいくことを試験的に行う。非常勤の先生を配置し、普通教室とは違うグループの中で、教室ではない新たな学びの空間を作っていく。鳥取県の新しい取組として注目していただきたい。

#### **(木本局長)**

- ・次に山本教育長にお願いする。

#### **(山本教育長)**

- ・色々な角度から様々な御意見をいただき、一つずつ、持ち帰って対応をしっかりと検討したいと思う。お聞きして思ったのは、実際に取り組めてはいるが取組が十分ではなかったり、発信が十分ではなかったり、検証が十分ではなかったり、取組の進め方などそうした課題も私自身覚えてところである。色々なお話の中で、来年度予定させていただいていることについても御意見いただき、大体の方向性は一緒だと思いながら聞かせていただいた。
- ・県立高校の在り方については、積極的に進めてほしいということで、来年度、長期的なところを見据え、在り方についても検討に取りかかろうとしている。国際バカロレアは新たな取り組みではあるが、良い方向になるよう、また中山間地の学校もなんとかしたいという話もあったが、そういったことも含めて再検討させていただきたい。
- ・ICT教育について、本県では利活用について遅れ気味の部分がある。この度、ハードを含めた整備が進められる中で、しっかりと取り組んでいきたい。一人一人のハンディを克服することができる手段でもあるので、しっかりと活用して子どもたちの教育ニーズに応え、働き方改革にも位置づけ取り組んでいきたい。
- ・特別支援教育など、よりインクルーシブな方向に進むべきである。発達障がい、不登校、特別支援等色々な方の困り感に対応していく必要があると考えている。子どもの困り感を中心に、そこに携わる大人たちがチームで解決していく、そういったバックアップ体制を整えていながら取組が必要だと思う。そういった意味でも、子育て・人財局という新しい局ができたので、教育委員会もしっかりと連携しながら取組を進めていきたい。

#### **(木本局長)**

- ・最後に、知事のほうからお願いする。

#### **(平井知事)**

- ・福壽委員から話があったが、大綱の家庭教育の充実のところはもう少し具体的に記載しても良いと思う。以前、ある高校で家庭と一緒に役割分担をして家庭教育を進めていき、学力向上に繋がったという例がある。宿題を出せば良いとか、何時間やれば良いということではないと思う。先ほど、松本委員からも100マス計算の話があったが、効率的に時間を区切って学力を鍛える、基礎力を養う、そういった視点を家庭教育の分野に取り入れても良いと思う。家庭教育の進め方のところは、これからもっと研究していく必要がある。
- ・運動の機会の提供についても大綱の書き方を、保護者や学校の教職員の研修等、もう少し踏み込んで書いた方が良かったと思った。ストレッチでも、自分自身も学校で教わったのとスポーツクラブで教わっているものは違うので、いかに無駄な危ないことをやっていたのかと思った。未だにそういったことがあるのだという話だった。大綱のところは今日の提案のところ収まったと思う。いただ

いた意見を基に、教育委員会と再度議論し、県議会を経て大綱を確定させ、新年度に向けて予算を活かしていただけるよう、バックアップしていきたい。

- 先ほど、坂口委員からフリースクール等への通所費助成や高等学校等の通学費助成について評価するお話をいただいた。子育て支援については、もう一歩進めるよう、執行部側としても計画しており、教育員会と連携して環境作りをしていきたい。
- 本日は、いくつかの論点があったが、一番注目されていたのはGIGAスクール、ICTのことだったと思うが、政府が予算を出しており、進め方が試されている。地域性があり、それぞれの学校現場に合ったモデル作りを進めていかないといけない。例えば中山間地とか、通信環境の問題もあり、そういった所では、5Gを組合わせていくこともできるのではないかと思う。今、ケーブルテレビ局と話をしているが、あるエリアに対して5Gの電波を吹かすことは技術的に可能だと聞いている。使い道としては、中学校・小学校に無線でシステムを組むとうまくかみ合う。教育委員会や学校の中だけで話を進めるのではなく、地域の情報通信社会の作り方、Society5.0の実現に向けた全体像との兼ね合いが出てくると思う。ICTの活用については、学校の先生は正直、分からないと思う。詳しい人が音頭を取り、子どもたちの学習記録からどこでつまづいたのかが分かり、振り返ることができたり、他の子どもたちと比較しながら競争することも可能となってくる。今は、先生の研修に重点を置いているが、ソフトウェア的なところも含めて今後の予算組みを考えていく必要も出てくるのかなど、意見を聞きながら考えたところである。まだ始まったばかりなので、一先ずハード整備をしようというのが現段階であるが、上手に組合わせていく必要があると感じた。
- 英語教育については、小学校で本格的に始まるところで、教育委員会も市町村と調整しながら、全体を引っ張っていく大事な時期である。佐伯教育委員が言われていたように、教師の加配だとか、制度上の仕組みはできているので、その辺も活用してもらいたい。松本委員の意見であったように高校教師の英検取得状況は全国トップになり頼もしい状況ではあるが、なぜ、高校の生徒の成績は落ちているのかと。その辺にもっと問題意識を持っていただき授業に結びつけていただくことが大切だと思う。高校の先生が中学校や小学校に出かけ、指導をしてもらうなど鳥取県らしいやり方もあるのではないだろうか。外国語教育はせっきく小学校の時代から始まるため、執行部側も応援し、人材を活用できるようバックアップしていきたい。
- 県立高校の魅力化については、国際バカロレアは一つの新しい取組である。高校改革といっても生徒の増加にはなかなか繋がらないという実態があり、私たちも一度原点に立ち返り、高校の存続、学級数の問題について、この1年で議論していってもらえたらと思う。
- 本日は、非常に有意義な議論になった。新しい有識者委員も入り、新たな視点も増えた。ぜひこれからも御指導いただきたい。先ほど、運動の機会が減っているという話もあり、私もこの会議が始まってから、普段にはない肩こりが始まり、運動の機会が足りないと思ったところである。この新メンバーでさらに教育に切り込んで行けたらと思う。本日は、本当に貴重な御意見をいただきお礼申し上げます。

#### **(木本局長)**

- 大綱については、教育委員会と最終調整を行い、皆様にもお示しさせていただく。それでは、令和元年度第2回鳥取県総合教育会議を終了する。